The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ブラジルに帰国した人々の教育戦略とその帰結に関する研究 : トランスナショナルな社会空間を生きる親と子どもの生活史から
Author(s)	山本, 晃輔
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56024
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　山本　晃輔　）	
論文題名	ブラジルに帰国した人々の教育戦略とその帰結に関する研究 ―トランスナショナルな社会空間を生きる親と子どもの生活史から―

論文内容の要旨

本研究は,日本からブラジルに帰国した親の教育戦略と子どもたちの教育達成を明らかにすることが目的である。具体的には,人類学や社会学で蓄積されているトランスナショナリズム研究を援用することから,グローバリゼーションを背景とし,急速に拡大する人々の「国際移動と教育」の今日的な課題を検討した。

本研究ではブラジルで収集した生活史データを検討の材料とした。人々の生活史を分析の対象とするのは,国際移動が親と子どもの生活に全面的な影響を与えるからである。特に,学齢期を日本とブラジルで生活することになった子どもたちを分析の対象とすることで,ブラジル帰国後の生活や進学上の課題を検討する。その狙いは,国際移動が生じさせる様々な課題を子どもたちがどのように受け止め,いかに乗り越えようとしているかを明らかにすることである。

日本における批判的教育研究は,半世紀以上の蓄積があるにも関わらず「自国に定住する外国人研究」に留まっている。グローバリゼーションを念頭とする教育政策においても,「自国民の海外進出」や「外国人留学生・人材の受け入れ」という点に注目が集まっているように,わが国においてグローバリゼーションとは「送り出し」か「受け入れ」といった単線的なものとして捉えられがちである。もちろん,受け入れた人々への処遇が国内問題として浮かび上がるのも自然なことであろう。こうした研究の重要性は言うまでもないことであるが,グローバリゼーションという社会変動を前にした時,「定住論」だけではない論点も浮かび上がる。「定住論」では捉えきれない問題,すなわち人々の国際的な往来である。

すでに2億人以上の人々が出身国以外で生活しているとされ,国際企業の躍進や航空網の整備,労働力の国際的な拡散などを背景とし,これまで以上に複雑で多岐にわたる人々の移動がみられるようになった。移民の流出入に関わる政策整備と権利保障は世界共通の課題となっている。世界的な動向に応答し,日本においても移民についての議論されるようになった。

こうした移民政策に関する議論は,日本においては古くからある問題である。我が国においても,本研究で取り上げる日系ブラジル人は,ブラジルに渡った日本移民をルーツとしている。1908年に日本からブラジルへと渡った日本移民は,生活の糧を求めた「出稼ぎ」である。そして,ブラジル日本移民は日本国内の不景気を背景とした政治主導の官製移民であった。日本移民らは,ブラジルで農業労働をおこなった後に,日本へ帰国,「故郷に錦を飾る」ことを目的としていた。ブラジル日本移民は日本国内の「人口問題」解消のための手立てであり,経済的成功を求めた「経済移民」でもある。

第二次世界大戦を挟み,多くの日本移民がブラジルでの永住を選択するようになる。永住を決めたことで,その子どもたちはブラジル国籍を取得し,ブラジルの教育をうけるようになった。そして日本移民の2世,3世は日本人と呼ばれるのではなく,日系ブラジル人（Nikkey）と呼ばれるようになる。戦後日本では国際協力機構（JICA）の前身となる海外移住事業団が1963年に設置されているが,主要な事業のひとつに戦後日本の人口過剰問題の解消のための南米向け移民の送り出しがあった。

その後,1980年頃からブラジルの不況と日本の好景気をうけ,今度はブラジルから日本人・ブラジル人・日系ブラジル人が「デカセギ」として日本へ渡った。1989年に改正された入管法は「定住ビザ」を新設した。日本移民の末裔であれば,ほぼ無制限に就労ができるなど特例的な処遇が設定されているが,これは官製移民失敗を反省し南米の日本移民への便宜を図る目的というよりも,日本におけるブルー

カラー労働者の代替労働力の受容の高まりから設定されたものである。こうして振り返ると,日本における移民政策は新しい問題というよりも,古くから議論され続けてき課題である。

もちろん,我が国におけるニューカマー外国人としての「日系ブラジル人」の流入とその帰国は,旧来の日本移民と同じ枠組みで捉えることはできない。オールドカマー外国人の処遇は戦後一貫して課題となってきた。ニューカマー外国人もその延長線上で「定住外国人」として位置づけられてきた。実際,90年代を通して在留外国人は増加し続けてきたことも外国人の定住論の重要性を際立たせている。ここに歴史的な観点やグローバリゼーションを背景とする人々の移動を踏まえたとき,日本とブラジル間における日本人・日系人・ブラジル人の移動は100年にわたり続いてきたことが浮かび上がる。移民とは歴史的な研究対象であるとともに,現代的な視点をもって分析する必要があるとすれば,日本とブラジル間での人々の往来は,日本における国家間移動の重要なモデルケースとして捉えることも出来よう。

そして,本研究が注目するのは人々の国家間の往来と次世代への教育である。ブラジルの日本移民がそうであったように,見知らぬ新しい土地において移民は生きていくためになんらかの努力を行う。移民らは移住国で無策のまま生活・定住するわけでもなければ,無策に国家間を移動するわけではない。こうした観点から現代の移民の生活に目を向けたとき,その有用性や有効性はともかく,移民らは国境や文化圏を跨ぐことの困難になんらかの「戦略」を用意するものである。とりわけ,次世代の教育においては,定住する人々とおなじく,移動する人々はなんらかの戦略を必要とする。

そこで本研究では,ブラジルに帰国した日系ブラジル人の親と子に注目し,将来の生活や苦難に対峙する際に行使される「戦略」や「戦術」を析出する。日系ブラジル人の社会状況や政治性・歴史性に目配りをしながら,「国際移動と教育」の困難だけを浮き彫りにするのではなく,困難を生きぬく親や子どもの主体的な生き様を描き出す必要がある。

以上の課題意識のもと,本論文の1章では,本研究の課題を明らかにする。そのために,欧米を中心とするグローバリゼーション論やトランスナショナリズム研究を概観することで,現代的な移民の特徴について探る。また,我が国において,「移動と教育」研究の必要性を考えるために日本の外国人と教育研究についても整理する。併せて,日系ブラジル人と教育研究についても概観した。

2章では,日系ブラジル人がどのような理由で日本へと渡り,ブラジルへと戻ることになったのかを,ブラジル日本移民の歴史をたどることから検討した。出発点をブラジル日本移民としたのも,世代を超えて日本からブラジル,ブラジルから日本,そして再びブラジルへ人々が移動していることが浮かび上がる。こうした歴史を振り返ることから,ニューカマー外国人を「ニューカマー外国人」「定住外国人」というだけでなく,流動的な人々,移動する人々として捉える必要性を明らかにした。

3章では日本からブラジルへの移動を支える教育機関として「ブラジル人学校」に注目した。これまで,日系ブラジル人に関する研究の多くは日本の公立学校に関する研究が多かった。ブラジル人学校を扱った研究も,日本での役割を問うものが多い。しかし本研究を通じて検討するように,ブラジル人学校は日本で生活するだけでなくブラジルに帰国するための教育を提供している。それは日系ブラジル人の「移動」を支える教育である。ここでいう「移動」とはブラジルへの移動もあれば,本格的に日本社会へ参入するという意味でもある。そこで本章では,浜松にあるブラジル人学校での調査データをもとに,「移動と教育」がどのように行われているのかを検討した。こうした議論を行うのも,4章以降でみるように,日系ブラジル人の親の教育戦略がブラジル人学校によって一部支えられているからである。

4章では,帰国した日系ブラジル人の家族の教育戦略を明らかにした。初期ニューカマー研究は外国人の「定住」を基本的な研究課題においている。しかし実際の日系ブラジル人は流動性の高い人々であり,日本とブラジルの間を移動しながら生活する人々である。だとすれば,「定住」を念頭としない教育戦略も存在するはずである。ブラジルに帰国した人々のデータを分析することを通じて,日系ブラジル人の親が「移動を念頭とする教育」を行っていることを明らかにした。

5章では,帰国した子どもたちの生活史データを記載することで,ブラジルでの生活世界を描いた。「移動することによって苦労する子どもたち」というだけでなく,親から与えられた資源を援用しながら,ブラジルでの生活を物語化することで意味付け,生き抜こうとする子どもたちの姿を描く。こうした議論が必要となるのも,親が「移動を念頭とする教育」を行ったとしても,ブラジルへの移動を意味づけられない子どもたちにとっては,ブラジルでの生活が苦悩に満ちたものとして語られがちだからである。他方で,日本での生活が苦しかったと語る子どもたちにとっては,ブラジル文化への馴染みのなさやポ

ルトガル語といった文化的な障壁があるとしても,ブラジルでの生活に積極的な意味を見出していくことがある。一般的に,移民の文化適応の成否は言語的能力やハビトゥスが課題であると語られているが,本章では言語能力やハビトゥスを通じて子どもたちが形成する「移動の物語」も移民の文化適応の成否を左右する要素であることを示した。

6章では,5章で検討した,子どもたちの「移動の物語」を分析することから帰国後の進路選択とその要因について検討した。ここでいう「進路選択」とはブラジルでの学校進学だけでなく,日本への再移動と就職といった幅広い子どもたちの選択を内包する。昨今の技術革新を背景とし,子どもたちはブラジルにいながら日本の情報を得ることができる。さらに安価な航空券の登場により,子どもたちは「望めば日本に行ける」状況にある。こうした状況にあって、日本に繋がった「接続」の物語と,ブラジルで生活することを念頭とする「切断」の物語に分化していく。こうした物語の分化に決定的な影響をあたえるのが子どもたちの「進路選択」である。ブラジルへの「移動の物語」に大きな影響を与えていることを明らかにした。

7章では,パラナ州アサイ町という小さな田舎町に帰国した子どもたちを事例に,日本と繋がり続ける子どもたちの「トランスナショナルな生存戦略」を示した。6章で検討したように,一部の子どもたちは自身の「進路選択」が明確になるにつれ,日本との繋がりを「切断」していく。しかし日本と「接続」し続ける子どもたちはインターネットを通じて,Kpopや漫画,FaceBookといった日本の若者文化を積極的に受容している。こうした「接続」は,旧来は文化的な不適応として語られる傾向にあった。他方で,長期間のインタビューを通じて見えてきたのは,子どもたちがブラジルで日本と「同時的」に消費することで,ブラジルでの生活を乗り切ろうとする姿であった。終章では本研究を改めて再整理し,知見のまとめをおこなった。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　山本　晃輔　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	志水　宏吉
副 査	教授	千葉　泉
副 査	准教授	高田　一宏
副 査	准教授	園山　大祐

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、日本からブラジルに帰国した親たちの教育戦略とその子どもたちの教育達成との関連を明らかにすることにある。人類学・社会学分野で蓄積されているトランスナショナリズム研究の枠組み・知見を援用しながら、急速に拡大する人びとの「国際移動と教育」の今日的課題に、ブラジルで収集したインタビューデータを素材に迫った。

論文は７つの章から構成されている。１章では、上記の課題に迫るために、先行研究の整理を行った。キーワードは、「グローバリゼーション」論、「トランスナショナリズム」論、「移動と教育」研究、「ニューカマー研究」である。２章では、日系ブラジル人が日本とブラジルの間をどのように行き来してきたのかについて、およそ１００年前の「ブラジル移民」の時代から通史的に検討を加えた。３章以降が、論文の本体に当たる部分となる。まず３章では、日本からブラジルへの移動を支える教育機関としての「ブラジル人学校」に着目した。具体的には静岡県浜松市にある特定のブラジル人学校を対象として選定し、「移動と教育」の実際の姿に迫った。４章では、帰国した日系ブラジル人家庭の教育戦略の諸相を明らかにした。対象となった家庭は全体で２６家庭、聞き取りを行った子どもはのべで５７名。そこから、「帰国のための環境整備」「私的な教育投資」「言語の戦略」「親族ネットワークの活用」という４つの教育戦略が導き出された。５章では、子どもたちの生活史データを分析することで、彼らのブラジルにおける生活世界のありようを描き出した。さらにそれに続く６章では、子どもたちの「移動の物語」という枠組みを設定し、「接続の物語」と「切断の物語」という２つの典型的語りを見出した。最後の７章では、ブラジルのある地方都市に焦点をあて、インターネットやアニメを媒介に日本につながり続ける子どもたちのアイデンティティのあり方について興味深い考察を展開した。

本研究は、これまでほとんど研究がなされて来なかった「帰国した日系ブラジル人家庭と子どもたち」を扱ったもので、その視点・枠組みのユニークさと見出された知見の斬新さは高く評価できるものであり、今後の日本の教育研究（ニューカマー研究・国際教育）に貢献する部分は大きいと考える。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。